

スズメバチに思うこと

古宮 正章

外来種による日本の生態系席巻がしばしば問題とされる。最近では対馬や北九州に侵入した凶暴なスズメバチが問題になっている。外来種によって日本固有種が打撃を受ける、あるいは生態系そのものが崩されるという話も数多くあるらしい。ところで逆に日本固有の種が外国に勢力を広げたという例はあるのだろうか。

日本の経済競争力という観点でも、この生態系のような事態が生じている。一時は自動車、半導体、デジタル家電など世界市場で強さを誇ったものの、特に新興国の急速な成長に押されて、今やその勢いを奪われつつある。少なくとも、単純な価格差やスピードなどの勝負で将来巻き返すのは、正直のところかなり困難な状況と言えそうだ。本来日本人はこの手の勝負が不得手だったのではないかとしみじみ考えてしまう。その決定的な理由は証明すべくもないが、島国としての地理的、気候的要因、そこから来る社会の人間関係、言語や文化の特異性などが、こうした“力任せ”の競争力とはなじまない国民性に仕立て上げたのかもしれない。外来種の闖入と、固有種と比較したその繁殖力を見ると、どこか象徴的で、教訓的な感じがしないでもない。

とは言うものの、手をこまねているわけにはいかず、違う勝ち方を模索する必要性が求められている。簡単に言えば、そうした“気風”を前提として、日本人以外にはまねのできない強みをじわじわと浸透させる手法である。ものづくりでの擦り合わせ技術が、その典型的な強みと評価されているが、製造業の領域では、最近では航空機の重要な部材に育ってきた炭素繊維に見られるように、根っこにある素材の開発が成果を示し始めている。最終製品では表には出てこないため地味な存在であるが、ものによっては、その部材、素材なしでは生産が成り立たないほど圧倒的な世界シェアを誇るものも少なくない。新しい機能価値を特異な工夫によって埋め込んだ、“日本ブランド”の再興である。同じ意味で Cool Japan の振興や、日本でなければ味わえない食、文化、旅などの魅力化はよい視点であり、まだまだ外国人の受入体制などに課題は残されているとはいうものの、海外の急速な評価を獲得し始めているのも事実である。

もう一つ、チャレンジングではあるが、グローバルなルールやプラットフォーム作りでイニシャチブをとることは、今後の姿勢として見逃せない。折しも TPP が大筋合意に至ったところであるが、そのほかにも会計制度、税制、環境対策（CO2 削減）など、特に意見対立が避けられない分野において、逃げ腰になるのではなく、むしろ先手を打って土俵作りを進める果敢さが望まれる。当面居心地の良い土俵を死守しようとしても、行き詰まりは見えている。自分にとっての負の副作用も踏まえた上で、“外来種”と渡り合って“固有種”がしっかり根付くための基盤固めを講じる必要がある。

2015 年 10 月 26 日